

## 暗點面に就いて

中川謙二郎

凡そ社會にも一家にも一個人にも、一方に光明なる表面があると同時に、他方には多少暗黒なる裏面がある。殊に我が國今日の社會に於ては、男女間の關係か未だ人道の光に照されず、女子には貞操を強ひ乍ら、男子は之を守るに及ばぬと考へて居る者が多く、甚しきは玩弄的に女子を養ひ置くを以て、一の誇として居る者すらもあるのである。尤も男子の貞操と云ふ徳目は、二三十年前始めて一部の有識者間に認められ、近年に至つて高等の教育ある人士は、表面上此に反對せぬ迄に進んだ新道徳であるから、舊來的道徳に於ては殆ど缺點のない様な人士でも、或機會には其の慾心を逞うして、女子を玩弄せんとする事があるのである。而して女子の此に對する道徳は、確乎たる自重の精神と、明敏なる智徳とに依り、斷然として一身の高潔を保つその他には、法の力に訴ふる外、全く道が無いのである。又社會には暗黒面に墮落した不幸の女子が頗る多い。彼等自身は左迄自己の不幸を自覺せぬとしても、夫は彼等を其儘に放任すべき理由とはならず、寧ろ一層憐むべき次第である。而て之を救済するに於て最有力なる者は、即ち高等教育ある女子であらうと思ふ。尤も斯う云ふ事に就いて、一人や二人で直接に其の力を揮つても、恐らく殆ど勞して効無きに終るであらうが、高等の教育ある女子が團結して、或は彼等不幸にして自ら覺らぬ女子の、眠れる良心を覺醒せしめ、或は社會の公徳に訴へて、女子が男子の玩弄物に非ざる所以を反省せしむるなど、種々適當なる手段方法を講

(8)

じたならば、必ずや相當の效果のあるべきを信する次第である。

次に又嫁して人の妻となり、夫の家に入つて其の家族の一員となるに及んでは、舅姑、小姑等殆んど初對面の人と團結して、親密なる生活を爲さねばならぬのである。然るに従來數十年の間、肉親の關係で團結して居つた一家内に、突然他人が家族の一員、然も甚だ重要な位置を占める一員として入り來るに於ては、從來家族であつた人々の精神に少からぬ動搖の生ずべきは、固より自然の理數と云はねばならぬ。而て此の動搖せる精神は新家族に對して、監視的、批評的の眼光となつて現はれるであらう。此は新人にとつて随分苦痛に相違あるまい。併し現に高等の教育を受けて、道徳、智識、技能上には、他の家族の人々に超越する實力があり、然も人を教化誘導するに就いて專心的の學修を卒へた手腕を有つて居る以上、舅姑、小姑等の人々と期月にして親昵の交を結ぶのは、必ずしも爲し難い事であるまい。又夫の性格と雖も、結婚以前に觀察し想像した所と同一ではなく、或意外の人である事も絶無とは云へぬ事である。併し夫たる人が妻を觀る場合に於ても、亦同様の感を起して居るかも知れない。他人の性格の全部分を明知するなどと云ふ事は、到底爲し難い事である以上、夫たる人に缺點があるとしても、紳士たるの價値を失墜する程の大缺點でないならば、寛宥して夫婦關係を繼續するの外は無い。然も夫婦關係の意義たる、單に互の歡樂の爲のみでなく、相互に品性の圓滿なる發達を期すると云ふ、高尚な目的が存するのであるから、妻は夫の缺點を補充するに自己の長所を以てするの覺悟がなくてはならぬのである。

要するに一家にも、夫婦間にも、亦表面と裏面とのある事は、到底免れ難い事であつて、唯其の光明なる表面的なる部分を成る可く多くし、暗黒なる裏面的なる部分を成る可く少くする事に努むべきである。而て此の事は主として女性の力に俟つべきであると思ふ。

(9)